

琉球大学学術リポジトリ

日常会話における「わかる」と「知る」の使い分け ー談話の分析を通してー

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2010-07-21 キーワード (Ja): わかる, 知る, 談話分析, 文脈, 動詞の置き換え キーワード (En): waku, shiru, discourse analysis, context, transposition of verbs 作成者: 葦原, 恭子, Ashihara, Kyoko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/17567

日常会話における「わかる」と「知る」の使い分け

—談話の分析を通して—

葦原 恭子

要 旨

動詞の「わかる」と「知る」は、「わかる」と「知る」が共に認識行為を表す類義語であり、その意味が重なり合う部分と重ならない部分の区別が複雑なことから、日本語学習者には使い分けが困難で、日本語教育の現場で、しばしば、指導上の問題となる。

本稿では、日本語教育の現場で「わかる」と「知る」の使い分けを学習者にわかりやすく解説することを目的として、日常生活の中で実際に交わされた談話をデータとして収集し、その話し言葉資料の分析を通して、「わかる」と「知る」の使い分けについて考察し、二つの動詞が置き換え可能な場合と不可能な場合の使い分け、及びその意味分類を明らかにした。

【キーワード】わかる 知る 談話分析 文脈 動詞の置き換え

1. はじめに

日本語教育の現場においては、学習者の誤用を分析した結果が、学習者個々人の日本語能力の向上のためのみならず、教材や教授法の開発に活用されている。学習者の誤用には様々な例が見られるが、動詞の「わかる」と「知る」は、「わかる」と「知る」が共に認識行為を表す類義語であり、その意味が重なり合う部分と重ならない部分の区別が複雑なことから、日本語学習者には使い分けが困難である。したがって、日本語教育の現場で、しばしば、指導上の問題の一つとなっている。以下の例は筆者が目にした日本語学習者の誤用例の一部である。

(1) *未来のことはだれも知らない。

(2) *あなたは日本の近代史についてどのぐらいわかっていますか。

上記の誤用例は、(1)については「将来、何が起こるかだれにもわからない」という意味を表そうとしたものであり、(2)については、「あなたは日本の近代史についてどれだけ知っていますか」という意味を表そうとしたものである。本稿では、日本語教育の現場で「わかる」と「知る」の使い分けを学習者にわかりやすく解説し、上記のような誤用を減らすことを目的として、類義語分析を行い、その使い分けを

明らかにする。

2. 先行研究

「わかる」と「知る」の意味を考察の対象としている先行研究には、日本語基本動詞用法辞典、日本語教育辞典、類語例解辞典等の辞典類に見られる記述の他に、渡辺 (1987)、森田 (1989)、武田 (1990)、牧野 (1996, 1998)、西山 (1997) があり、これらはいずれも二つの語の相違点に焦点をあてて、分析を行っている。高橋 (2003) は、これらの先行研究の中で、渡辺 (1987) から、「わかる」が〈潜在的能力〉を表すという点と、牧野 (1996, 1998) から「知る」が〈体験性〉を表すという点を継承している。そして、先行研究の問題点として、いずれの研究も、どのような場合に二つの語が意味的に接近するのか (置き換えが可能になるのか) については明らかにされていないという点と、「わかる」と「知る」を多義語として扱っていないという点を挙げている。高橋 (2003) は、二つの語を多義語として扱い、それぞれの語が担うすべての意味を考察範囲に含めるとし、その結果、「知る」を別義 1～4 に、「わかる」を別義 1 a～c 及び 2 に分類している。高橋が、「わかる」と「知る」を多義語としてとらえ、その別義の意味を明らかにしたことは評価に値する。しかし、日本語教育の現場において「わかる」と「知る」の使い分けを解説する際の参考にするには、いくつかの問題点がある。高橋 (2003: 35) では、「知る」の別義 1 を、「〈主体が〉〈 (主体にとって) 新規の情報を〉〈得る〉」と定義し、以下のような用例が示されている。

- ・曾野綾子という小説家の存在を初めて知ったのは、昭和二十九年である。
- ・一番現場の状況を知っているのは、実際に現場にタッチしている人でしょう。

上記の用例の分析として、高橋は、別義 1 の最初の用例は「存在」そのものが問題になっているため、「わかる」との置き換えが不可能であるが、次の用例はその「内容」が問題となっているため、置き換えが可能であるとしている。そして、別義 1 の「情報」は「対象の存在」に関するものから「対象の内容」に関するものまで幅があるとしている。本稿では、まず「わかる」と「知る」の置き換えが可能な場合と不可能な場合を明らかにし、それらを別義として意味分析をしていくため、上述のような別義 1 に含まれている「知る」の用例は、二つに分けて記述する立場をとる。また、高橋の「わかる」の別義には「同定する」という用語による分析がある。張・馬場 (2005) は、その分析結果は参照しつつも、張が中国人母語話者であると

いう立場から、分析に使用されている語や表現が難解で、日本語学習者にはわかりにくいと述べている。そして、日本語学習者に比較的わかりやすいと思われる用語で意味分析を行い、それらに中国語訳をあてはめて対照している。意味分析の用語が外国人学習者にとってわかりやすいという点は、本稿でも継承すべき点であると思われるが、張・馬場(2005)では、「わかる」と「知る」に対応する中国語が非常に多岐にわたっているということに焦点があてられており、その使い分けの区別について整理がされているとはいいいがたい。

以上のような先行研究を基に、本稿では、「わかる」と「知る」は類義語であり、多義語であるという立場で、日本語学習者にその使い分けを解説する際に有用な用語を用い、意味分析を行う。また、先行研究ではいずれも、小説や新聞記事といった書き言葉による資料から用例を収集し、分析を行っているが、本稿では、日常生活の中で実際に交わされた談話をデータとして収集し、その話し言葉資料の分析を通して、「わかる」と「知る」の使い分けについて考察する。これは、森田(1996: 285)の「『意味』を表現過程から切り離して、辞書的な意味として記述することは、真の意味での実態をとらえたことにはならない。言語行為として考えていこうとするなら、文脈と意味との関連をもっと重視し、表現者の意識の流れに沿った把握の態度に徹するべきであると信じる」という説を援用するものであり、言葉を「表現理解行為における語義意識」としてとらえ、「語彙は決して個々の単語の総体ではなく、表現の場面に置かれた、文章談話の文脈中において働く生きた活動体」としてとらえる立場をとることによる。さらに、これは、「わかる」と「知る」という動詞が、日本語教育の初期段階、いわゆる初級のレベルで学習することがほとんどであり、会話教材を通して説明がなされることが一般的であることからしても、有効な分析方法であると考えられる。

3. 談話にみられる「わかる」と「知る」の用例

3.1. 用例収集法

本稿では、「わかる」と「知る」の談話における使い分けを分析するにあたり、以下のような収集法で用例を収集した。用例の収集者は、筆者が、2005年から2008年にかけて、東京都内及び東京近郊にある民間の日本語教師養成機関3か所において、類似語分析の方法論を指導した際に、その講義を受講していた養成講座受講生である。

- ルール 1. 日常生活の中で発話された談話で、「わかる」もしくは「知る」が含まれたものを集める。動詞の形式については、現在形、過去形、活用したもの、名詞修飾形なども可とし、制限は設けないものとする。
- ルール 2. 発話は収集者本人が発話したもの、または本人が実際に見聞きしたもののみとし、架空の発話は作らない。これは、「わかる」と「知る」が実際の言語活動において、どのように現れるかを見るためである。
- ルール 3. 収集した発話は、発話ごとに情報カードに記載する。
記載のポイント：収集日、発話者、発話された状況、発話後の状況

上記のルールに基づいて作成される情報カード記載例を以下に示す。

○○○○年○月○日（曜日） ○：○○ 発話場所 _____ で 発話者： _____ 発話の状況： _____ 発話： A： B： 発話後の状況： _____

3. 2. 収集された用例の概要

前節で述べた用例収集法により収集された用例の概要は、表 1 の通りである。

表 1 用例の概要

収集時期	2005年2月～2008年12月	収集地域	東京都内及び東京近郊
用例総数	430例		
発話場所	自宅（114例） 職場（97例） 学校（64例） 居酒屋・レストラン（45例） 公共交通機関（37例） テレビ・映画（27例） 電話（23例） 通りで（5例） 病院・美容院・ショッピングセンター（11例） 空港（3例） メール（4例）		

3. 3. 収集された用例の意味分類

収集された 430 の用例は、まず置き換えが可能かどうかで分類した。その結果、表 2 の通り、「わかる」のみが使用可能な例が 191 例、「知る」のみが使用可能な例

が40例, 「わかる」と「知る」の置き換え可能な例は199例であった。次に, 「わかる」のみ使用可能な場合, 「知る」のみ使用可能な場合, 「わかる」と「知る」の置き換えが可能な場合, それぞれの用例はどのような意味分類になるかを分析した。その分析結果は表3の通りである。意味分類に使用した用語は, 日本語教育の現場で学習者に使い分けを解説することを意識し, 極力平易なものを選択している。次項からは, それぞれの意味分類に当てはまる用例を挙げながら, 解説をしていく。

表2 使用が可能な動詞の数

使用可能動詞	数
わかる	191
知る	40
わかる・知る	199
合計	430

表3 「わかる」と「知る」の意味分類一覧

使用可能動詞 (該当数)	意味分類	該当数	
わかる (192)	特定する	32	
	理解する	相手の気持ち・感覚	14
		物事の本質	13
		方法	13
		物事の内容	22
		原因・理由	16
	記憶している	6	
	状況を把握した	32	
	命令・依頼・アドバイスを受け入れたことを表明する	22	
	予測する	22	
知る (40)	新規の情報を得る	31	
	関係がある	9	
わかる・知る (198)	客観的情報を得る	111	
	存在を認知している	87	

4. 談話に見られる「わかる」と「知る」の使い分け

4.1. 「わかる」のみが使用可能な場合

4.1.1. (既知のAがAであると) 特定する (ことができる)

この分類に相当する例は32例であった。いくつか例をあげてみよう。これらすべて, 発話者が発話時より前に認識した存在や情報Aに再び遭遇した際に, それらを既知のAであると特定できるという例である。これは, すなわち, 発話者が既に

知っていた対象を見て、それらを既知のものであると認識できるということである。高橋 (2003) によれば、「知る」の場合、「対象の存在」に関する情報は、主体にとって「新規の情報」であって、主体が初めて入手した情報であるという。下記の二例はいずれも「対象の存在」は既知の情報である。したがって、「知る」の使用は不可能となる。

(3) <自宅で・朝食をとっている娘と出かけようとしている母の会話>

娘：おはよう。あれ、それ、昨日買ったスカート？

母：あ、わかっちゃった？どう？

娘：いいんじゃない。丈もちょうどいいし。

(4) <会社で・同僚同士の会話>

A：昨日、フィギュアスケート、見た？

B：あ、見た、見た。やってるの知らなくて、テレビつけたときは始まったよ。

A：それにしても本田武史太ったよねー。

B：本当。だれかわからなかったよ。

プロになるとどうして太るかね。

4. 1. 2. 理解する (相手の気持ち, 感覚, 物事の本質, 方法, 内容, 原因・理由)

これらは「理解する」という動詞で置き換えることができる例である。学習者に用例を示しつつ解説する際には、何を理解するのかを示し、別々に提示した方がわかりやすい。

(5) 相手の気持ちの理解

<会社で・社員同士の朝の会話>

A：急に寒くなったねー。朝起きるのがつらいよ。

B：あー、わかる、わかる。蒲団から出たくないよね。

(6) 相手の感覚の理解

<通りで・女子高校生同士の会話>

A：なんかさ、もうM (友人の名前) うざくね？

B：わかる、メガネこわれてっし。

A：(爆笑)

(7) 物事の本質の理解

<電車で・同僚AとBの会話>

A: (学ぶことには) とにかくお金がかかりますよね……。

B: そうそう, 何で学生の頃もっとしっかり勉強しとかなかったのかって, 思うよねえ……。今はさあ, 自分で学校行くのに, 自分で学費自分で全部払うじゃない? そうするとさあ, 親はこれの何倍も出してたかと思うと, すごいなあって思うよねえ。

A: 親のありがたみって, そういうところでもよくわかりますよねえ。

(8) 方法の理解

<会社で・同僚AとBの会話>

A: 今度, 新しくコピー機を買おうと思うんだけど, 接続の仕方が難しそうで。

B: 今のコピー機は設定の仕方が簡単だから, 説明書を読めば自分でできるよ。

A: わかるかなあ……。不安だけどやってみます。

(9) 内容の理解

<教室で・講師が講義の受講生に向かって話す>

A: ここの皆さんは, 授業中とても熱心ですよ。うなずきながら聞いてくださったりして。ほんとうに一生懸命で。「わかった, わかった」とうなずいてくださるので, わかったかと思って, テストをしてもないんですよ。

(10) 原因・理由の理解

<玄関で・小学生の息子と母の会話>

息子: お母さん, 今日, 燃えるゴミの日?

母: そうだよ。

息子: そのゴミ, 燃えちゃうの? (泣きだす)

母: なに, どうしたの。なんで, 泣いてるの? 言わないとわかんないよ。

息子: ゴミ箱に色鉛筆が入ってた。捨てられてるかも……。

4. 1. 3. 記憶している

これらの例は, ある情報を持っており, 記憶が定かであれば, その情報を取り出すことができ, 記憶が定かでなければ, その情報を取り出すことができないという

場合である。情報が既知であることから、やはり「知る」の使用は不可能である。

(11) <自宅で・60代後半の姉妹の会話>

妹：この間、ここに修理に来てくれた人だけど、お姉さんの同級生かなと思って。

姉：そんな昔のことわかるわけないよ。昨日のことだって覚えてないんだから。

(12) <娘の実家で・父と娘の会話>

父：Aさんの連絡先、書いたと思ったけど、どこに書いたか忘れたんだけど。

娘：そう。でも、今、わからないよ。今日、手帳も携帯も忘れてきちゃったから、家に帰ってから電話しようか。

4. 1. 4. 状況を把握している

これらは、発話者が、自分自身がおかれている状況や、話し相手や第三者のおかれている状況を把握している状態に変化したという場合である。「状況を把握した」ことを示すために、「わかった」「わかりました」という形式を用いることが特徴である。

(13) <会社で・上司と部下の会話>

上司：おはよう。

部下：あ、おはようございます。

上司：今日、Cちゃん、ビザの申請で会社に来るの、遅れるって言ったから。

部下：あ、はい。わかりました。

(14) <電話で・派遣会社の社員と派遣社員の会話>

B：今日、30分残業しちゃって、そしたらバスがなくなっちゃったんですよ。どうすればいいですか？タクシーって呼んでもらったり……。

A：あ、そうなの。じゃね、ちょっと呼んでみるんで、いったん切りますね。で、タクシー呼べたらまた電話しまーす。

B：わかりました。ありがとうございます。

4. 1. 5. 相手の依頼, 命令, アドバイスを受け入れたことを表明する

これらは、相手の依頼、命令、アドバイスを聞き、それらを受け入れたことを表明するという場合である。前節の例と同様に、「既に受け入れた」ことを示すために「わかった」「わかりました」という形式を用い、このような形式が固定していることが特徴である。先行研究では、これらを「承諾」としてまとめているが、日本語教育の現場では、別々に教えることが多いため、それぞれの用例を示すこととする。

(15) 相手の命令を受け入れる

〈自宅で・パソコンゲームをしている娘と洗濯物を畳んでいる母の会話〉

母：そこのシャツは2階に持ってってね。いつも置きっぱなしなんだから。

娘：わかったってば。

(16) 相手の依頼を受け入れる

〈喫茶店で・友人同士が同窓会の連絡について話す〉

A：ねえ、携帯ドコモだよな？確か美和子とか秋津とかもドコモだったよね？

B：うん、確か。

A：じゃ。美和子と秋津に電話してみてる？

B：わかった。

(17) 相手のアドバイスを受け入れる

〈通りで・老人同士の会話〉

A：(イナバウワーの) 真似すると腰やられるよ。もう若くないんだから。

B：わかった。わかった。

4. 1. 6. 予測する

これらは、発話者にとって未知の状況を既知のここのように特定するという場合であるが、前出の既知のAがAであると特定するという例と区別し、「予測する」という意味に分類した。これは日本語教育の現場での指導の際、学習者にわかりやすく説明することを考慮したものである。このような例は22例見られたが、予測の対象は、個人の予定、将来から、スポーツ等の試合の結果、天気予報など、比較的、広範囲にわたっていた。

(18) 〈自宅で・父と娘が北京オリンピックの野球について話す〉

父：大丈夫じゃない。台湾には負けないだろ。

娘：そんなのやってみなきゃわかんないじゃん。

レッズ（サッカーチーム名）だって最下位で負けたし。

4.2. 「知る」のみが使用可能な場合

森田（1989：234-236）によると、「知る」は「頭脳の中に存在しなかった事物を存在に変えること」であり、これに対して「わかる」は、「もともと存在する事柄の実態を解すること」である。「知る」のみ使用可能な例は40例見られたが、そのうちの31例は発話者が新規の情報を得たという例であった。また残りの9例は、高橋（2003：36）のいう「主体が既知の対象と何らかの関連を持つ」に相当する例である。牧野（1998：95-96）は、「十九歳の時、女を知った」「たばこの味を知った」「酒を知った」という例をあげ、「知る」の持つ「体験性」について意味の焦点化を試みているが、本稿が分析している430例の談話の中には、このような例に相当するものは収集されなかった。これは、「女を知った」等の表現が、修辭的な表現であり、日常会話で頻繁に用いられることが少ないということを示していると思われる。

以下に「知る」のみが使用可能な二種の用例を示す。

4.2.1. 新規の情報を得ている

次の例は発話者が新規の情報を得たという例である。いずれも「知る」のみが使用可能である。

(19) <テレビのインタビュー番組で・インタビュアーと通行人の会話>

インタビュアー：羞恥心（バンド名）が活動を休止するのを知ってますか。

通行人：わー、知らないわ。ショック。

(20) <喫茶店で・クラスメート同士の会話>

A：あの二人、付き合ってるんだって。

B：あの二人って？

A：佐々木さんと石川さん。

B：マジで？全然知らなかったよー。

A：みんなに内緒で付き合ってるらしいからねー。

4.2.2. 関係がある

これらの例は、すべて否定形で表現されるのが特徴である。既知であったものを、あえて「知らない」を使用することで、未知のもの扱いすることによって、関係を白紙に戻してしまうという表現である。

(21) <空港の税関で・恋人同士の会話>

彼氏：あれ？おれの持ってたふくろがない……。

彼女：……。

彼氏：機内の荷物置きに置いてきちゃったか。どうして言ってくれなかったの。

彼女：知らないよ！いつも人のせいにしないでよ。

(22) <電話で・先輩と後輩の会話>

先輩：はあーい、はあーい。

後輩：あ、Aさんっすか。留守電聞いて電話したんすけど、金ないんすよねえ、すごい遊びたいんすけど。

先輩：おーおーおー、俺が貸してやるよ、おーおーおー。

後輩：いや、でも悪いし、しかも他にも債務あるんで。不良債権になっても知らないっすよ。

4.3. 「わかる」と「知る」の置き換えが可能な場合

4.3.1. 客観的情報を得ている

この分類に属する用例は、誰にとっても確認可能な事柄であり、一般的事実となっている情報を発話者が持っているかどうかの問題になる場合である。このような場合には「わかる」と「知る」の置き換えが可能である。森山（1992）によると、ある情報が主観的情報か客観的情報かを区別するのは、その情報が共通知識としてどこまで一般性を持つかということだという。これを受けて、高橋（2003）は、客観的情報とは、共有可能性を持つ情報であるとし、さらに「知る」の補語名詞句は「客観的情報」として捉えられることになり、「わかる」の補語名詞句は「主観的情報」として捉えられるとしている。本稿における分類では、その情報に共有の可能性がある場合を、「客観的情報」とし、その情報の捉え方の違いによって「わかる」と「知る」を使った場合にニュアンスの違いがあるとする。下記の二例は共に、共有可能

な客観的情報の保持についての会話であるが、(24)の「知る」を用いた場合は、誰でも手に入れられる情報を得るか得ないかに焦点が当たっているのに対し、(23)で「わかる」を用いた場合は、情報を得るプロセスにも焦点が当てられている。(23)の例では、得ようと努力すれば、その情報が得られることを知っていたにもかかわらず、それをし損なうことによって情報を得られなかったというプロセスを意識した発話となっている。

(23) <自宅で・父と娘の野球についての会話>

父：明日の先発だれ？

娘：わかんない。ラジオ聞き逃した。

父：俺も……。

(24) <居酒屋で・友人同士の新車購入についての会話>

A：(モーターショーは) 今度いつやるんだろう？

B：開催日時についてはよく知らないから、インターネットで調べてみたら？

A：そうだね。そうしてみるよ。ありがとう。

4.3.2. 存在を認知している

これらの例は、発話者がある人物や場所、事物の存在を認知しているという場合に用いられる。このような例は「わかる」と「知る」の置き換えが可能である。

(25) <自宅で・母と娘の会話>

娘：お母さん、この俳優、知ってる？

母：あ、なんとかって言った人の息子だろ。松本幸四郎だっけ？

娘：違うよ。全然古いよ。

母：そうかい。じゃ、私ゃ、知らないよ。

(26) <職場で・店員二人とお客の会話>

客：すみません。この辺に交番、ありません？

店員A：少々お待ちください。Bさん、この辺に交番、あったっけ？

店員B：確かこの道をまっすぐ行ったところの交差点に合ったような気がしますけど、でも、あんまり聞きませんね。交番……この辺は治安がいいから。

店員A：そうだよ。すみません。よくわからないんですが。

客: そう, ありがとう

(26)のような場合は、「わからない」の置き換えとして、「知らない」を使うことができるというものの、実際使用すると、やや失礼なニュアンスを伴う。「わかる」がある思考のプロセスを経て、答えを導き出すという性格を持っているため、他人からの質問に対し、「知らない」と即答するということは、答えるための努力を放棄しているということになるからであろう。日本語教育の初級レベルの授業では、このような場合は、「わかりません」を使った方が丁寧であると指導することが多いのは、このような特徴も一因となっていると思われる。

5. まとめ

ここまで、収集された談話に見られた「わかる」と「知る」の使い分けについて考察してきた。ここで、本稿の冒頭に示した学習者の誤用について、再度見てみよう。

(1) *未来のことはだれも知らない

(2) *あなたは日本の近代史についてどのぐらいわかっていますか。

(1)は、本稿の分析によると「わかる」の「予測することができる」の例にあたる。学習者への解説として、まず、「予測する」という場合は「知る」は使用できないという説明が可能である。また、「知る」という動詞は「新規の情報」を獲得しているかないかということの問題にするのにもかかわらず、この例では、情報を獲得できるかどうか定かではないという状況を表すため、「知る」は使用できない。

(2)の例は、本稿の分析によると「わかる」と「知る」の置き換えが可能な場合、「客観的情報を持っている」にあたる。ここでは「どのぐらいわかっていますか」と問うた場合は、「日本の近代史について知識を得るために、これまでどれだけ努力をし、どれだけの情報を得て来ているのですか」というニュアンスを伴い、「どのぐらい知っていますか」と問うた場合は、「客観的情報の量はどれぐらいか」を単に聞いているということになる。この例は、作成中のアンケート用紙に見られた誤用例であり、この場合は「知る」を用いた方が、より客観的となり、適切な動詞の選択となると言える。

以上のことから、本稿において、用例を収集・分析した結果得られた意味分類は、学習者が「わかる」と「知る」の使い分けについて混乱を来している場合の解説としても有効であり、また、誤用を減らすための意味導入の際にも参考にすることが可能であると思われる。

6. おわりに

本稿では、日本語学習者の誤用を減らす、あるいは、日本語教育の現場での適切に誤用訂正をするために有用な結論を導き出すべく、日常会話における談話に見られる「わかる」と「知る」の使い分けを分析した。収集された用例が実際の発話であるという点は、会話教育のためには有用であると思われるが、収集した用例には若干偏りが見られ、「わかる」と「知る」の全貌を明らかにしたとは言いがたい。より幅広く、より多くの用例を収集し、分析を続けることが必要である。また、本稿では「わかる」と「知る」の談話における意味分析のみを行ったが、談話における機能分析も有用であると思われる。さらに、日本語学習者の「わかる」と「知る」の使い分けに関する誤用という観点からも分析をすることが望ましい。これらの点については、今後の課題として、別稿に譲ることとする。

参考文献

- 小泉保他編 (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店, 248-249, 552-554
- 佐治圭三 (1982) 「類義語各説『分かる』と『知る』と『理解する』」『日本語教育辞典』大修館書店, 429
- 小学館辞典編集部 (1994) 『使い方のわかる類語例解辞典』小学館, 217-219
- 高橋圭介 (2003) 「類義語『知る』と『わかる』の意味分析」『日本語教育』119号, 日本語教育学会, 31-40
- 武田明子 (1990) 「『知る』と『分かる』をわけるもの—日本語とドイツ語における『認識語』の対照分析を中心に—」『獨協大学ドイツ学研究』24号, 獨協大学学術研究会, 101-138
- 張静・馬場俊臣 (2005) 「日本語と中国語の認識を表す動詞の対応—『知る』と『分かる』の中国語訳を中心にして—」『北海道教育大学紀要』第56巻第1号, 67-81
- 西山祐司 (1997) 「『NPが分かる』の曖昧性とコピュラ文」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』29号, 慶應義塾大学言語文化研究所, 111-134
- 牧野美智子 (1996) 「現代日本語動詞『シル』と『ワカル』の類義関係について—文脈において二動詞がとる対象からの分析—」『湘南文学』30号, 東海大学日本文学研究会, 157-168
- 牧野美智子 (1998) 「『知る』の〈体験性〉にみる意味の焦点化の構造」『湘南文学』32号, 東海大学日本文学研究会, 95-107
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店, 234-236
- 森田良行 (1996) 『意味分析の方法—理論と実践—』ひつじ書房, 285

森山卓郎 (1992) 「文末思考動詞『思う』をめぐって一文の意味としての主観性・客観性」『日本語学』11巻9号, 明治書院, 105-116

渡辺伸治 (1987) 「シル・ワカル」国広哲弥編『意味分析2』東京大学文学部言語学研究室, 9-11

(琉球大学留学生センター)

A Discourse Analysis for Using Verbs '*wakaru*' and '*shiru*' in Daily Conversations

ASHIHARA, Kyoko

Keywords: *wakaru*, *shiru*, discourse analysis, context, transposition of verbs

Abstract

It has been one of the issues to be solved how to teach the similarities, and the differences between '*wakaru*', and '*shiru*' in many of Japanese language classrooms. These two verbs are synonyms, and they both imply recognition. It is rather complicated for Japanese language learners to choose the right verb according to the context in daily conversation.

The purpose of this paper is to describe how to use '*wakaru*', and '*shiru*' for learners though analyzing actual discourse data collected in daily conversations. The collected data for this paper are up to 430, and they are classified into three groups. One appears in the situations that only '*wakaru*' are used, another appears in the situations that '*shiru*' are used, and the last one appears in the situations that both '*wakaru*' and '*shiru*' could be used.

The classification and the analysis done in this paper should be useful for Japanese language instructors to clarify the difference between '*wakaru*' and '*shiru*' in Japanese language classrooms, when they try to explain the difference to their learners. It also could be a great help for Japanese language learners to reduce their misapplications of these two verbs.

(University of the Ryukyus)